

國學院大學學術情報リポジトリ

林陸朗先生の思い出

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒寄, 雅志, Sakayori, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000434

になった今、本書がどれほど価値のある、また超人的労作なのかもよくわかる。そして、すっかり日焼けして書棚にならぶそれらを机から眺めると、朗らかで厳しい林先生と、そのもとであがいた大学院生時代の自分自身を色々と思い出す。だから、ふと迷った時に目に入る位置に、その七冊を並べているのである。

大学院を修了してから、林先生とお目にかかる機会は減り、特に最近はいさばらくお会いしていなかった。ただ時々、お手紙で近況などを色々と知らせていただいていたので、先生のお体のことが気がかりなまま時間がかり過ぎていた。だから、鈴木先生からのお電話で林先生ご逝去の第一報に接した時は、何とも悔しい思いであった。翌日は、予定していた調査のため、鬱々とした気分が長崎に入った。そこで私より一足先に到着していた調査本隊と合流すると、彼らは先ほどまで長崎歴史文化博物館で、林先生のルーツでもある唐通事林家に関する展示をたまたま見ていたのだという。この調査も林先生に導かれているような気がした。

今はただ、先生のご功績に深甚なる敬意を表しつつ、安らかに想われますよう心からお祈りいたします。

林陸朗先生の思い出

酒寄 雅志

二〇一七年二月十七日(金)、國學院大學名誉教授林陸朗先生が逝去されました。先生は丑年で、私の二回りの九十一歳でした。

私にとって先生との最初の出会いは、NHK教育テレビの小学校六年生向けの歴史教育番組「くらしの歴史」でした。「踊る大捜査線」の神田総一郎署長役で人気を博した若き日の北村総一郎氏らが出演したドラマ仕立ての番組に、先生ご自身出演され、歯切れの良い解説をされていました。高校生であった私はこの歴史教育番組を時折見ることもあり、お会いしたこともないにもかかわらず、先生は身近な存在でした。國學院大學入学後、初めて先生にお目にかかった折には大いに感動したものでした。先生は長く番組制作に関わっておられました。「くらしの歴史」の後継番組である「いっこく堂のんげん日本史」の監修を私に託され、現在放送中の中村獅童主演の「歴史にドッキリ」まで続くことになりました。

私が國學院大學に入ったのは一九七〇年ですが、先生は前年に『上代政治社会の研究』（吉川弘文館、一九六九年）を上

梓され、奈良朝の皇位継承・巡察使、蝦夷社会、さらに桓武朝や嵯峨朝の研究など幅広い関心のもとにまとめられて、一九七〇年十月に学位を授与されています。入学したばかりの私はそうした先生の研究事情を知るよしありませんでした。

私が先生から直接教えを受けるようになったのは、サークルの史学会古代史部会の『続日本紀』の講読でした。毎週月曜日に先生の第五研究室で、時には先生を交えて輪読をしていました。先生は四年生の『続日本紀』の演習を担当されていましたが、困塊の世代の学生で教室は一杯。私も二年生の時から履修生でないにもかかわらず受講していましたが、演習とは言いながら、わずか数行の史料を読む程度で、ほとんどは先生が説明されていました。後日、その時の講義ノートをお宅で見せていただく機会がありました。ピッシリと書きこまれた何冊ものノートには驚いたものでした。先生は「ライフワークだよ」と、おっしゃっていました。それは『完訳・注釈続日本紀』（現代思潮社、一九八五・八九年）として結実します。さらに二〇一〇年には、『続日本紀』にみえる五十四人の薨卒伝を、「現代語訳」「訓読文」「原文」「語句説明」「考察」の順に叙述された『奈良朝人物列伝』（思文閣出版）として出版されています。先生は停年後も、長らく新宿の朝日カルチャーセンターで『続日本紀』の講義されていた

ように記憶しています。

こうした『続日本紀』研究の初期の成果として世に問われたのが、人物叢書の『光明皇后』（吉川弘文館、一九六一年、一九八六年新装版）だと思います。大学入学間もない私もすぐに購入して読み、こうしたことが契機となり、奈良時代に関心を持った私は、『続日本紀』を素材とした卒業論文の指導をお願いすることになりました。今思い起こすと恥ずかしい限りですが、卒業論文提出日の一週間前、「間に合いそうもありません」と泣き言を言うと、先生は「今年出せなくて、どうして来年出せるか」と諭されました。思い直して何とか提出することができましたが、その直後、先生は体調を壊されて日赤に入院し、卒業式には参列されず、病床に卒業の報告に伺ったことが思い出されます。そしてこの卒業論文を『国史学』に掲載できるように、先生は懇切にご指導くださり、私の研究活動への扉を開いてくださいました。この歳になっても、初めて論文が活字になったときの感激は忘れられません。

卒業後、先生が主催して月二回ぐらいだったでしょうか、日曜日の午後に常磐松の史学科資料室で、卒業生や大学院生とともに正倉院文書の研究会を行うようになりました。「正税帳」がどのように記載されているかなどを学ぶとともに、欠失した部分を復元して意見交換をするなど、私の学問の幅

を広げる契機となりました。その成果は、林陸朗・鈴木靖民編『復元天平諸国正税帳』（現代思潮社、一九八五年）として刊行されました。私も周防国の正税帳の復元を担当しました。その後も、写経所文書の研究をしばらく続けられました。研究会終了後に、井の頭線渋谷駅高架脇の「ナルゲ」という焼き肉屋で、先生を囲んでビールを呑みながら議論をしたことは、研究会以上に楽しかったものです。

一九八六年に、國學院大學栃木短期大学に四番目の学科として日本史学科が開設され、私もその一員として古代史を担当することになりました。開設に当たって、先生の一方ならぬご尽力があり、そのご縁によって先生には毎年夏と冬の集中講義にお出でいただきました。授業が終わると、蔵の街に繰り出して一献、そしてお得意のカラオケというお決まりのコースをお供をしたものです。

また日本史学科としての学会誌『栃木史学』を創刊することになり、先生にもご寄稿いただきました。「桓武天皇と遊獵」と題する論文で、先生のもうひとつのライフワークであった桓武朝研究の一側面として、遊獵を通して桓武天皇の専制君主としての性格を明らかにされたものでした。先生が桓武朝に関心を持たれたのは、「昭和三十年から本格的に行われはじめた長岡京の発掘調査に強い刺激を受けた」と『桓武朝論』（雄山閣、一九九四年）の「あとがき」に書かれていま

す。『長岡京の謎』（新人物往来社、一九七二年）も、そうした関心のなかで書かれたと思いますが、学部生だった私にとつて、この本を通して長岡京の発見に生涯をかけた中山修一氏の執念に、大いに関心を持ったことを記憶しています。先生の栃木短大への出講は、北海道の國學院短期大学の学長をされるまで、五年ほど続きました。

そして一九九六年、先生の古稀を記念して林陸朗・鈴木靖民編『日本古代の国家と祭儀』（雄山閣）を献呈しましたが、合わせて鈴木靖民先生と相談をして林家のルーツを訪ねる福建省への旅行券をお贈りする手配を致しました。私の手元はその時の旅行企画書・予算書などが残っています。それには院友でリョービ・ツアーズの高橋俊和氏による銭林・林家の第一世林瑞如の出身地「福建省福州府福清県化北里銭林」の候補地が三つほど上げられています。結局、福清市港頭鎮の前林に比定して、奥様とともに訪ねられました。その時の覚え書き「福建省福清前林村訪問記」が、ご葬儀の際に配布されました。

先生は晩年、ご先祖の職であった「長崎唐通事」のご研究に意欲的に取り組まれ、『長崎唐通事―大通事林道策とその周辺』（吉川弘文館、二〇〇〇年）として上梓されています。この出版を記念して、同年五月十九日に院友会館で五十余名の人々が集って、「林陸朗先生を囲む会」を開きました。今、

その時の集合写真を見ていますが、時の移ろいを感じざるを得ません。先生はさらにこれに「林道栄の平井明保追悼誌」と「木村兼葭堂と薩摩藩士林与一郎」の二編を増補され、二〇一〇年に長崎文献社から出版されています。

この間、一九九九年三月に私が学位を取得すると、先生は早速お手紙を下さり、「学位は研究者の一里塚だから、これを機にますます研究に励むように」とのお言葉を寄せて下さいました。先生のお人柄を偲ぶことのできるお手紙として大事にしたいと思いますが、訃報に接した直後、鈴木靖民・佐藤長門両先生と弔問にお宅へ伺ったおり、勉強部屋を拝見しましたが、その机の脇には岩橋小弥太先生（一八八五―一九七八年）の写真が飾られていました。事情を知らない人は御尊父かと思まがうかもしれませんが、前述の『光明皇后』の「はしがき」で「学生時代から常に私の研究生活の光となつて下さっている岩橋小弥太先生」と書かれ、また『上代政治社会の研究』の序文を岩橋先生にお願いしていることから、先生は岩橋先生を師父として尊敬されていたのでしよう。私にとりまして、林先生には公私ともに岩橋先生のような存在であつたと改めて思っております。

先生は実に多くの研究成果を残されました。ここに全てを語ることはできませんが、『新撰日本古典文庫 将門記』（現代思潮社、一九七五年）や、伴信友の『比古婆衣』上・中・

下（現代思潮社、一九八三―八七年）の校訂をはじめ近世史の村落社会研究にまで及んでいます。とりわけ近世史研究は、岩橋先生の勧めがあつたとも聞いています。

國學院大學退職後も、お父様のステッキを持たれた先生と国史学会などでお会いすることはありましたが、お宅にお目をお訪ねすることをご遠慮したこともあつて、次第にお目にかかる機会も少なくなり、國學院大學のサークルであつた史学会の卒業生の会誌「猿山の集い」に寄せられる先生ご自身の近況報告などで、先生がお元気であることを確認するばかりでした。

歳に不足はないとは思いつつ、現実に先生の訃報に接してみると、寂寥感は否めません。これからは、先生の書かれた御著書や論文などを、時において読み返しながら、先生を偲びたいと思います。ご冥福をお祈りいたします。